

歯科衛生士学生の入学後の口腔内状況 および歯科保健行動*

——3年制学生と2年制学生の比較——

畠中 能子**・細見 環***・柴谷 貴子***

Oral health status and dental health behaviors
among dental hygiene students after college entrance

——Data from students enrolled at Kansai Women's College in fiscal 2004 and 2006——

Yoshiko Hatanaka, Tamaki Hosomi and Takako Shibatani

要約：歯科衛生士入学生の口腔内状況および歯科保健行動を把握するために、2年制歯科衛生士養成課程の平成16年入学生99名および3年制養成課程の平成18年度入学生117名を対象に、入学後に歯科検診および歯科保健行動調査を実施した。

その結果、2年制養成課程入学生および3年制養成課程入学生の永久歯の萌出状況は、ほぼ同様の状況であった。一人平均DMF歯数およびDMF歯率は、2年制養成課程入学生のほうが、3年制養成課程入学生よりも、統計的に有意に低く、健全歯率は、統計的に有意に高かった。D歯率、F歯率は、3年制養成課程入学生のほうが、2年制養成課程入学生よりも高い傾向を示した。入学後の歯科受療行動は、3年制養成課程入学生では96%と、2年制養成課程入学生の16%よりも、統計的に有意に高く、その受療理由は齲蝕によるものがほとんどであった。このことから、3年制養成課程入学生のDMFは、入学後の歯科受療行動によるF歯の増加の影響と考えられた。1日の歯磨き回数、入学後の歯磨き回数の変化、歯磨剤の使用の有無に関する回答は、2年制および3年制入学生とも同じ傾向を示した。使用している歯磨剤のフッ素配合の認識の有無は、2年制学生では認識している者の割合が50%、わからないが36%、3年生学生では、それぞれ27%、72%で統計的に有意な差異が認められた。入学後の歯磨きを丁寧にするようになったかの質問は、2年制学生で、留意する者の割合が92%と統計的に有意に高かった。3年生学生では、留意するが40%、変わらないが59%であった。3年制養成課程入学生の、入学後の歯科受療行動は高いものであったが、歯科保健行動の変化はあまり認められず、入学後の歯科衛生士に対する職業意識を構築する教育を考える必要性が示唆された。

Abstract : We herein conducted dental examinations and a survey of dental health behavior on newly enrolled dental hygiene students, specifically 99 students who entered the 2-year dental hygiene education program in 2004 and 117 students who entered the 3-year dental

*本論文の要旨は、第17回 日本口腔衛生学会 近畿・中国・四国地方会（平成18年6月18日）において発表したものを改編した。

**関西女子短期大学 助教授

***関西女子短期大学 教授

hygiene education program in 2006, in order to investigate the oral health status and dental health behavior of students entering the dental hygiene education program.

The results showed that the eruption status of permanent teeth were similar for new 2-year and 3-year program students. New 2-year program students had a significantly lower mean DMFT index and DMF rate and a significantly higher intact tooth rate than new 3-year program students. New 3-year program students tended to have higher rates of decayed and filled teeth than new 2-year program students. The proportion of students who visited dental clinics following enrollment was significantly higher among new 3-year program students (96%) than new 2-year program students (16%), and most of these visits were due to dental caries. Therefore, the DMF rate of new 3-year program students was thought to be affected by increases in the number of filled teeth resulting from dental clinic visits following enrollment. Responses regarding daily tooth-brushing frequency, changes in tooth-brushing frequency after enrollment, and use of toothpaste were similar for new 2-year and 3-year program students. Furthermore, 50% of new 2-year program students were aware of the fluoride content of their toothpaste and 36% were not sure, indicating a significant difference in comparison to new 3-year program students, of whom 27% were aware of the fluoride content of their toothpaste and 72% were not sure. In addition, a significantly higher proportion of new 2-year program students (92%) replied that they took greater care when brushing teeth after enrollment. As for new 3-year program students, 40% replied that they took greater care after enrollment, while 59% replied that they did not. Although a high proportion of new 3-year program students visited dental clinics following enrollment, no significant changes in their dental health behavior were observed. These findings suggest the need to develop education programs that promote professional consciousness among newly enrolled dental hygiene program students.

Key words : 口腔内状況 oral health status 3年制歯科衛生士教育 the 3-year dental hygiene education program 歯科保健行動 dental health behavior 歯科受療行動 dental clinic visit 行動変容 behavior change 職業意識 professional consciousness

I 緒 言

平成 17 年国勢調査結果によると、老年人口割合は 21% に達し、平成 62 年には、35.7% に達すると予想され¹⁾、わが国の少子高齢化は加速的に進行している。また、生活習慣病の台頭に見る疾病構造の変化、高度化する医療技術など、保健医療を取り巻く情勢は大きく変化している。このような社会情勢から、歯科衛生士の行う専門的業務内容も、ますます高度なものを求められることになり²⁾、歯科衛生士教育内容の見直しが図られ、歯科衛生士の修業年限は、平成 22 年度までにすべての養成機関にお

いて、従来の 2 年から 3 年以上に移行されることとなった³⁻⁵⁾。このような社会における歯科衛生士の役割がますます増すと予測される状況下で、入学したときから専門職業人としての社会化が始まると言われる医師や看護師同様⁶⁾、歯科衛生士養成機関に入学する学生の、「歯科衛生士」に対する職業意識を向上させることは、教育する側の責務と考える。看護師の養成機関でありながら、明確な目的を持たずに入学した学生が 10% 存在したという報告⁷⁾があるように、社会構造の変化や価値観の多様化によって学生の入学動機や職業意識は変化しており⁶⁾、歯科衛生士を目指す学生もその傾向が

ないとは否定できず、入学後の教育の重要性がますます高くなってきた。

関西女子短期大学歯科衛生学科は、平成 17 年度より 3 年制歯科衛生士養成課程が始まり、現在に至っている。歯科衛生士養成課程の修業年限が 2 年制から 4 年制まで混在する過渡期に、3 年以上の養成課程であることを認識して入学した学生の口腔内状況を、教育する側が把握することは、本学の歯科衛生士教育に活かすことができると考える。そこで、まず、その基礎資料として、関西女子短期大学 2 年制および 3 年制の歯科衛生士養成課程に入学した学生を対象に、歯科検診および歯科保健行動に関する質問調査を実施し、歯の萌出状況や歯科保健行動の修業年限別比較、およびそれらの関連性について検討した。

II 対象者および方法

1. 対象者

対象者は、平成 16 年度および平成 18 年度関西女子短期大学に入学した歯科衛生士学生のうち、歯科検診および歯科保健行動に関する質問調査の、両方とも協力が得られた者である。16 年度および 18 年度の歯科衛生士養成課程の修業年限は、それぞれ 2 年制、3 年制であった（以下、平成 16 年度入学生を 2 年制学生、平成 18 年度入学生を 3 年制学生と表記する）。対象者総数は、2 年制学生 99 名、3 年制学生 117 名、合計 216 名であった。調査時の平均年齢は、2 年制学生および 3 年制学生ともに 18.2 ± 0.4 歳（平均値 \pm S.D.）であった。

2. 調査方法

歯科検診の実施時期は、2 年制学生および 3 年制学生とも、入学年度の 6 月に行った（それぞれ平成 16 年、18 年）。歯科検診は、歯科医師 2 名により、歯科用ミラー、歯科用探針（YDM 社製、#8）を用いて、対象者を水平歯科診療台に寝かせ、頭部の安定を確保し、照明下で行った。調査時間は、一人当たり約 5 分間とした。

口腔内の歯の状況は、各歯を健全歯、未処置歯、処置歯、喪失歯、便宜抜去歯、先天欠如歯、乳歯に区分した。便宜抜去歯および先天欠如歯は、歯科検診時、対象者に個別に問診し確認を行った。歯科矯正治療による第三大白歯の抜歯は、便宜抜去歯に区分した。

この結果から、現在歯数を 100% として、現在歯に対する健全歯数、処置歯数、未処置歯数、喪失歯数の占める割合を算出した。

また、齲蝕に関する代表的な指標である DMF^{8,9)}を用いて、修業年限別に、一人平均 DMF 歯数、DMF 歯率、D 歯率、M 歯率、F 歯率、健全歯率を算出し、2 年制学生と 3 年制学生の 2 群間で比較検討した。

入学後の歯科受療行動の有無および歯磨き習慣などの歯科保健行動の把握は、自記式質問票にて行った。2 年制学生は歯科検診の前日に、事前に質問票を配布し回収した。3 年制学生は歯科検診時に質問票を配布し、歯科検診終了後にただちに回収した。回収率は、それぞれ 85 %、100% であった。

3. 統計解析

2 年制学生と 3 年制学生との 2 群間の各種 DMF の比較には、対応のない t 検定を行った。M 歯率は喪失歯数が少ないため、解析から除外した。

質問調査項目に関する解析は、 χ^2 検定を行った。統計解析ソフトは JMP 6 for Windows (SAS Institute Inc.) を使用し、有意水準は $p < 0.05$ とした。

III 結 果

1. 修業年限別歯種別現在歯の状況（表 1）

第三大白歯を含めて一人平均現在歯数は、2 年制学生 28.1 ± 1.5 本（平均値 \pm S.D. 以下同様）、3 年制学生 28.2 ± 1.4 本で、ほぼ同じであった（表の記載は省略）。2 年制および 3 年制学生のどちらも、下顎中切歯と第二小臼歯を除いて、歯の萌出率は 99% 以上であった。第三

表1 修業年限別歯種別現在歯の状況

| | 中切歯 | | 側切歯 | | 犬 歯 | | 第一小臼歯 | | 第二小臼歯 | | 第一大臼歯 | | 第二大臼歯 | | 第三大臼歯 | |
|----------------|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|--------------|--------------|
| | 2年制 N=99 | 3年制 N=117 | 2年制 N=99 | 3年制 N=117 | 2年制 N=99 | 3年制 N=117 | 2年制 N=99 | 3年制 N=117 | 2年制 N=99 | 3年制 N=117 | 2年制 N=99 | 3年制 N=117 | 2年制 N=99 | 3年制 N=117 | 2年制 N=99 | 3年制 N=117 |
| 現在歯数 | 197 | 232 | 196 | 233 | 197 | 234 | 185 | 220 | 198 | 230 | 198 | 233 | 196 | 233 | 17 | 30 |
| 健全歯数 (%) | 166 (84.3) | 175 (75.4) | 180 (91.8) | 189 (81.1) | 193 (98.0) | 221 (94.4) | 156 (84.3) | 176 (80.0) | 166 (83.8) | 181 (77.7) | 100 (50.5) | 97 (41.6) | 116 (59.2) | 124 (53.2) | 15 (88.2) | 15 (50.0) |
| 上 未処置歯数 (%) | 13 (6.6) | 10 (4.3) | 7 (3.6) | 14 (6.0) | 2 (1.0) | 2 (0.9) | 3 (1.6) | 3 (1.4) | 5 (2.5) | 7 (3.0) | 10 (5.1) | 19 (8.2) | 13 (6.6) | 34 (0.2) | 2 (13.3) | 11 (36.7) |
| 処置歯数 (%) | 18 (9.1) | 47 (20.3) | 9 (4.6) | 30 (12.9) | 2 (1.0) | 11 (4.7) | 26 (14.1) | 41 (18.6) | 27 (13.6) | 42 (18.3) | 87 (43.9) | 117 (50.2) | 66 (33.7) | 75 (32.2) | 0 (0) | 4 (13.3) |
| 顎 喪失歯数 (%) | 0 (0) | 0 (0) | 0 (0) | 0 (0) | 0 (0) | 0 (0) | 0 (0) | 0 (0) | 0 (0) | 0 (0) | 1 (0.5) | 0 (0) | 1 (0.5) | 0 (0) | 0 (0) | 0 (0) |
| 便宜抜去歯数 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 12 | 14 | 0 | 2 | 0 | 0 | 0 | 0 | 3 | 0 |
| 乳歯数 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 2 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 先天欠如歯数 | 1 | 2 | 2 | 1 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 2 | 1 | 0 | 0 |
| 現在歯数 | 195 | 234 | 198 | 234 | 198 | 233 | 186 | 223 | 193 | 230 | 198 | 234 | 197 | 234 | 22 | 39 |
| 健全歯数 (%) | 195 (100) | 234 (100) | 197 (99.5) | 234 (100) | 198 (100) | 233 (100) | 180 (96.8) | 203 (91.0) | 176 (91.2) | 194 (84.3) | 57 (28.8) | 56 (23.9) | 93 (47.2) | 92 (39.3) | 11 (50) | 16 (41.0) |
| 下 未処置歯数 (%) | 0 (0) | 0 (0) | 1 (0.5) | 0 (0) | 0 (0) | 0 (0) | 1 (0.5) | 5 (2.2) | 4 (2.1) | 4 (0.4) | 10 (5.1) | 17 (7.3) | 17 (8.6) | 26 (11.1) | 11 (50) | 22 (56.4) |
| 処置歯数 (%) | 0 (0) | 0 (0) | 0 (0) | 0 (0) | 0 (0) | 0 (0) | 5 (2.5) | 15 (6.7) | 13 (6.7) | 32 (13.9) | 131 (66.2) | 160 (68.4) | 87 (44.2) | 116 (49.6) | 0 (0) | 1 (2.6) |
| 顎 喪失歯数 (%) | 0 (0) | 0 (0) | 0 (0) | 0 (0) | 0 (0) | 0 (0) | 0 (0) | 0 (0) | 0 (0) | 0 (0) | 0 (0) | 1 (0.4) | 0 (0) | 0 (0) | 0 (0) | 0 (0) |
| 便宜抜去歯数 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 12 | 11 | 1 | 2 | 0 | 0 | 0 | 0 | 14 | 0 |
| 乳歯数 | 2 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 4 | 2 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 先天欠如歯数 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 |

数値は、同歯種左右両側の合計歯数、() は、現在歯数に対する割合：%

大白歯を除くと、第一小臼歯において、便宜抜去歯が一番多く認められた。乳歯の萌出が認められたのは、下顎第二乳臼歯および乳中切歯、上顎乳犬歯および第二乳臼歯であった。上顎に乳犬歯の萌出、上顎第一大臼歯および上下顎第二大臼歯に先天欠如歯が認められた。

健全歯の割合が高かった歯種は、2年制学生および3年制学生どちらも、下顎中切歯、側切歯、犬歯で、ほぼ100%であった。未処置歯の割合は、2年制学生および3年制学生どちらも、下顎第二大臼歯が一番高かった。上顎中切歯および側切歯の未処置歯の割合は、大白歯を除くと、4~7%と高かった。処置歯の割合は、下顎第一大臼歯においておおよそ70%と一番高かった。上顎第一大臼歯および下顎第二大臼歯では40%以上、上顎第二大臼歯では30%以上と、順次高かった。中切歯、側切歯、犬歯の処置歯は下顎では認められず、一方、上顎では認められ、2年制学生および3年制学生どちらも、中切歯の処置歯の割合は側切歯よりも高かった。喪失歯は、2年制および3年制学生どちらもほとんど認められず、上顎第一および第二大臼歯と下顎第一大臼歯に1本認められたのみであった。

2. 修業年限別各種 DMF の比較 (表2)

一人平均 DMF 歯数は、2年制学生 5.7 ± 4.0 本、3年制学生 7.2 ± 5.1 本で、2群間に統計的に有意な差異が認められ、3年制学生の一人平均 DMF 歯数の方が2年制学生よりも高かつ

表2 修業年限別各種 DMF の比較

| | 2年制 N=99 | 3年制 N=117 | F 値 | p 値 |
|-----------------|-----------------|-----------------|-----------------|------|
| 一人平均 DMF 歯数 (本) | 5.7 ± 4.0 | 7.2 ± 5.1 | 5.48 | 0.02 |
| 健全歯率 (%) | 78.8 ± 13.9 | 74.1 ± 18.0 | 4.47 | 0.04 |
| DMF 歯率 (%) | 19.8 ± 13.7 | 25.0 ± 17.7 | 5.56 | 0.02 |
| F 歯率 (%) | 16.6 ± 13.1 | 20.5 ± 16.0 | 3.66 | 0.06 |
| D 歯率 (%) | 3.1 ± 5.0 | 4.5 ± 6.1 | 3.05 | 0.08 |
| M 歯率 (%) | 0.07 ± 0.7 | 0.03 ± 0.3 | - ¹⁾ | - |

¹⁾: M 歯数が少なかったため、分析せず 平均値±S.D.

た。

健全歯率は2群間に統計的に有意な差異が認められ、2年制学生のほうが3年制学生よりも健全歯率が高かった ($p=0.04$)。DMF 歯率は統計的に有意な差異が認められ、3年制学生のほうが2年制学生よりも DMF 歯率が高かった ($p=0.02$)。F 歯率および D 歯率は統計的に有意な差異は認められなかったが、3年制学生のほうが2年制学生よりも高い傾向を示した。

3. 入学後の歯科保健行動について (表3)

1) 入学後の歯科受療行動について：2年制と3年制学生との2群間に、統計的に有意な差異が認められた ($p<0.001$)。3年制学生の96%以上の者が、入学後に歯科医院を受診していた。その受診理由は、2年制および3年制学生ともに、齲蝕による割合が最も高かった。

2) 歯磨き回数について：1日の歯磨き回数は、統計的に有意な差異は認められなかったが、2年制および3年制学生ともに、「2回」である者の割合が80%以上と最も高かった。入学後の歯磨き回数の変化は、統計的に有意な差異は認められなかった。2年制および3年制学生ともに、「変わらない」という者の割合が80%以上と最も高かった。

3) 入学後の歯磨き習慣について：入学後、「歯磨きを丁寧にするようになったか」について、2年制および3年制学生の間、統計的に有意な差異が認められた ($p<0.001$)。2年制学生では、「留意するようになった」と答えた者の割合が90%を超えた。3年制学生では、「変わらない」と答えた者の割合が約59%と最も高かった。

4) 歯磨剤について：歯磨剤の使用の有無は、統計的に有意な差異が認められ ($p=0.04$)、2年制および3年制学生とも、歯磨剤を使用する者の割合が93%以上と最も高かった。また、使用歯磨剤にフッ素が配合されていることを認識しているかどうかについても、統計的に有意な差異が認められた ($p<0.001$)。2年制学生で

表 3 歯科保健行動に関する質問

| 質問内容 | 修業年限 | 選択肢% (人) | | | χ ² 値 | p 値 |
|----------------------|------|------------|------------|-----------|------------------|--------|
| | | 受診した | 受診しなかった | | | |
| 入学後の歯科受療行動の有無 | 2 年制 | 16.0 (15) | 84.0 (79) | | 165.44 | <0.001 |
| | 3 年制 | 96.6 (113) | 3.4 (4) | | | |
| 歯科受動行動の理由 | | 齲蝕 | 智歯 | その他 | 2.39 | 0.30 |
| | 2 年制 | 73.3 (11) | 6.7 (1) | 20.0 (3) | | |
| | 3 年制 | 88.5 (100) | 1.8 (2) | 9.7 (11) | | |
| 1 日の歯磨き回数 | | 1 回 | 2 回 | 3 回以上 | 3.19 | 0.20 |
| | 2 年制 | 2.0 (2) | 80.8 (80) | 17.2 (17) | | |
| | 3 年制 | 6.0 (7) | 82.1 (96) | 12.0 (14) | | |
| 入学後の歯磨き回数の変化 | | 増えた | 変わらない | 減った | 3.07 | 0.21 |
| | 2 年制 | 16.2 (16) | 82.8 (82) | 1.0 (1) | | |
| | 3 年制 | 8.6 (10) | 89.7 (106) | 1.7 (2) | | |
| 入学後、歯磨きを丁寧にするようになったか | | 留意する | 変わらない | その他 | 71.41 | <0.001 |
| | 2 年制 | 91.9 (91) | 7.1 (7) | 1.0 (1) | | |
| | 3 年制 | 40.2 (47) | 59.0 (69) | 0.9 (1) | | |
| 歯磨剤の使用の有無 | | 使用する | 使用しない | その他 | 6.28 | 0.04 |
| | 2 年制 | 93.9 (93) | 3.0 (3) | 3.0 (3) | | |
| | 3 年制 | 93.2 (109) | 6.8 (8) | 0 (0) | | |
| 使用歯磨剤のフッ素配合の有無 | | フッ素配合 | フッ素配合でない | わからない | 28.12 | <0.001 |
| | 2 年制 | 53.2 (50) | 10.6 (10) | 36.2 (34) | | |
| | 3 年制 | 26.6 (29) | 1.8 (2) | 71.6 (78) | | |

は「フッ素配合である」と答えた者の割合が 50%以上であったのに対して、3 年生学生では 27%であった。

IV 考 察

一人平均現在歯数は、2 年制学生および 3 年制学生ともに約 28 本であった。これは、平成 11 年歯科疾患実態調査報告¹⁰⁾の同年代の 15-19 歳における女性のデータと比べると、ほぼ同じであった (27.98 本)。対象者が平成 16 年度および 18 年度入学生のため、平成 11 年歯科疾患実態調査報告とは時期が異なり、一部公表されているが^{11, 12)}、より新しいデータの平成 17 年歯科疾患実態調査結果の報告が待たれるところである。本報告の 2 年制学生および 3 年制学

生の、現在歯の萌出状況がほぼ同じであることから、近年の 18 歳前後の女性における歯の萌出状況を推測することができると思われる。この年代における第三大臼歯の萌出状況のデータは少なく、対象者の約 9 割に下顎第三大臼歯の萌出が認められたという報告¹³⁾もあるが、本報告では、下顎左右側どちらかに第三大臼歯が萌出していた者は、対象者全体の 2~3 割であった。

処置歯および未処置歯の割合は、特に、上下顎第一大臼歯と第二大臼歯で高くなり、大臼歯部に齲蝕経験の多いことが認められた。また、上顎中切歯および側切歯の未処置歯および処置歯は、それぞれ隣接面齲蝕および隣接面齲蝕処置の可能性が高いと考えられた。

平成 11 年歯科疾患実態調査の 15-19 歳女子のデータと、2 年制学生および 3 年制学生の一人平均 DMF 歯数、DMF 歯率、F 歯率、D 歯率、健全歯率を比較すると、2 年制学生および 3 年制学生のどちらの学生も、歯科疾患実態調査結果よりも良好な結果であった。一般者よりも歯科医療に関与する歯学部学生の方が良好な状態であるという報告同様¹⁴⁾、歯科衛生士学生の口腔内環境の方が、一般者よりも良好であると推察された。

一方、2 年制学生と 3 年制学生との口腔内状況を比較してみた場合、F 歯率および D 歯率は、3 年制学生のほうが 2 年制学生よりも高い傾向を示し、DMF 歯率は、有意に 3 年制学生のほうが 2 年制学生よりも高かった ($p = 0.02$)。一人平均 DMF 歯数も、3 年制学生のほうが、2 年制学生よりも、統計的に有意に高かった ($p < 0.05$)。これは、処置歯数の占める割合が、上顎第二大臼歯以外どの歯種においても、3 年制学生の方が 2 年制学生よりも高かったため、DMF 歯のうち、F 歯が多かったためと考えられる。このことは、入学後の歯科受療行動があった者の割合が、3 年制学生では 96%、2 年制学生では 16% と、3 年制学生において非常に高く、その受療行動の理由の主なもの齲蝕であったことから、入学後に齲蝕の歯科治療を実施し、処置歯が増えた結果と推察される。歯科検診では、便宜抜去歯が上下顎ともに第一小臼歯において、特に多く見受けられた。これは、矯正歯科治療経験者が、2 年制学生では 24.7% (24 名)、3 年制学生では 22.2% (26 名) であったことから、矯正歯科治療の一環で便宜抜去する者が多かったと推察される。このことは、歯科矯正患者という、もともと歯科衛生士の職業認識のあった学生が、2 年制学生および 3 年制学生のどちらにもほぼ同じ割合で約 4 分の 1 存在することから、この影響による歯科受療行動は、同程度であったと考えられる。平成 11 年保健福祉動向調査¹⁵⁾によると、「過去 1 年間に歯科で診療を受けたことがある」者

は、男性で 33.2%、「治療中」の者は 5.3%、女性では、それぞれ 36.9%、6.6% と、女性のほうが高い割合であった。また、年齢階級別にみると、15~24 歳では、それぞれ 28.8%、4.4% で、年齢が高くなるにつれて徐々に増加し、55~64 歳では、それぞれ 42.1%、7.4% であった。これらの結果は、過去 1 年間というスパンからみた受療率であるが、今回調査したものは、4 月に入学してから歯科検診実施 6 月までの間の歯科受療行動の有無である。短期間であるにもかかわらず、3 年制学生において、これだけの高い歯科受療率が認められた理由として、3 年制学生は、本学の 3 年制教育課程になって 2 年目の入学生であり、全国の中でも 3 年制に比較的早期に移行していることから、学生自身に、入学前から 3 年制の学生であることに強い自覚を持って入学してきた可能性があると考えられる。つまり、「知識レベル」というより、むしろ「意識レベル」の影響が強かったのではないかと推察される。関西女子短期大学歯科衛生学科入学生の入学動機に関する意識調査を 3 年制と 2 年制の入学生間で比較検討した大岡らの報告でも、3 年制の短期大学歯科衛生士養成機関に入学した学生は、2 年制の学生よりも、積極的な理由で 3 年制の養成課程を選択し、学生生活のゆとりと、より充実した教育内容を期待していることが示され¹⁶⁾、3 年制の歯科衛生士養成課程に意義を感じて入学する者が多かったことが示唆され、強い「意識レベル」の影響がうかがえる。

しかしながら、歯科検診結果より、3 年制学生の D 歯率が 2 年制学生よりも高かったことから、もともと齲蝕要治療という、歯科医院に行く動機があり、齲蝕の多い口腔内環境であったかもしれず、たとえ「意識レベル」が高くても、実際の口腔衛生管理能力は未熟であることが推察された。1 日の歯磨き回数が「1 日 2 回」である者の割合および入学後の歯磨き回数の変化も「変わらない」者の割合が、80% 以上であったことから、具体的な口腔衛生管理

能力は備わっていなかったと考えられる。入学後、「歯磨きを丁寧にするようになったか」の質問について、「留意するようになった」と答えた者が、2 年制学生では 90% 以上と高い割合を示したのに対して、3 年制学生では約 40%、むしろ、「変わらない」と答えた者の方が 59% と一番高かった。歯科受療行動に関しては、3 年制学生が非常に高い受療率を示したが、歯磨きに留意するという歯科保健行動には、あまり関心が寄せられていなかった。また、歯磨剤の使用は、2 年制学生および 3 年制学生どちらも、ほとんどの学生が使用していたが、その歯磨剤の成分内容に関しては、十分な認識を持たないまま使用していると推察された。2 年制学生および 3 年制学生どちらも、使用している歯磨剤にフッ素が配合されているかどうかの認識は低く、「わからない」と答えた者の割合が高かった。「フッ素が歯にいい」ということは、現在の商品宣伝で、イメージ的に捉えられはしているが、実際に自分が使用している歯磨剤については、意識を持って使用するまでにはいたっていないことが推察された。

平成 18 年 4 月現在、全国に歯科衛生士養成機関が 144 校存在し、3 年以上の修業年限に移行した学校および養成所は 55 校存在する（著者調べ）。どの養成機関も、独自の教育内容を構築するための検討が進められていると拝察するが、本学歯科衛生学科においても、教育内容の見直しおよび充実化の検討は、常に必要であると自戒している。入学後まだ間のない時期は、学生が「歯科衛生士」という「職業意識」を持つ、ごく初期の段階であり、この時期から始まる入学生の歯科保健行動の変化は、入学後の歯科衛生士教育の影響を強く受けると思われる。今回の結果から、歯科衛生士養成機関に入学した学生の、「歯科衛生士」に対する専門職業意識も入学した時点から始まると考えられ、入学後間もない時期の口腔内を入学生に明示することは、その意識向上の一助につながると示唆された。

V まとめ

歯科衛生士入学生の口腔内状況の実態および歯科保健行動を把握するために、2 年制および 3 年制の歯科衛生士教育養成課程の入学生を対象に、歯科検診および歯科保健行動に関する質問調査を実施した結果、歯科衛生士学生の口腔内状況は、一般人よりも良好であった。歯の萌出状況は、修行年限によって差異はないが、3 年制養成課程の学生の方が、2 年制養成課程の学生よりも、一人平均 DMF 歯数が高く、健全歯率も低かった。歯科受療率が 3 年制養成課程の学生で非常に高かったが、一般的な口腔清掃習慣においては、良好であるとは言えなかった。3 年制養成課程学生の、入学前の歯科衛生士に対する意識レベルは高いことが推察されるが、入学後の歯科保健行動に積極的な変化はなく、入学後の歯科衛生士に対する職業意識を構築する教育の必要性が示唆された。

謝辞

本研究は、平成 17 年度関西女子短期大学奨励研究費の助成によるものであり、ここに深く感謝の意を表します。

引用・参考文献

- 1) 財団法人厚生統計協会編集「国民衛生の動向」厚生指針臨時増刊 53 巻第 9 号 p 33-35: 2006 年
- 2) 可児徳子「平成 11 年厚生科学研究 今後の歯科衛生士に対する養成方策に関する総合的研究」p 1-6: 2000 年
- 3) 官報第 3934 号: 2004 年
- 4) 石井拓男「2010 年までにすべての歯科衛生士学校・養成所が 3 年制へ」25 巻 p 72-74: 2005 年
- 5) 日本歯科医学教育学会編「歯科医学教育白書 2005 年版 (2003~2005 年)」日本歯科医学教育学会雑誌別冊 p 160-163: 2006 年
- 6) 白鳥さつき他「看護学生・医学生の職業適応と自我状態に関する研究」医学教育 35 巻 4 号 p 235-244: 2004 年
- 7) 白鳥さつき「看護学生の職業社会化に関する

畠中能子他：歯科衛生士学生の入学後の口腔内状況および歯科保健行動

- 研究」山梨医科大学紀要 19 巻 p 25-30：2002 年
- 8) 飯塚喜一編集「口腔衛生学－歯科保健統計を含む－」学健書院、東京、p 106-108：1999 年
- 9) 安井利一編「口腔保健マニュアル」南山堂、東京、p 14-15：2006 年
- 10) 厚生労働省医政局歯科保健課編「平成 11 年歯科疾患実態調査報告－厚生省健康政策局調査」口腔保健協会、東京：2001 年
- 11) 厚生労働省医政局歯科保健課「平成 17 年歯科疾患実態調査結果の概要について」厚生指 53 巻 10 号 p 52-53：2006 年
- 12) 鳥山佳則「平成 17 年歯科疾患実態調査結果の概要について」日本歯科評論 66 巻 8 号 p 169-172：2006 年
- 13) 繁田有紀子「本校衛生学科学学生の過去 4 年間における下顎第三大臼歯の位置的考察」兵庫歯科学院雑誌 26 巻 1 号 p 33-35：2003 年
- 14) 可見瑞夫他「歯学部学生の口腔診査成績の年次推移」岐阜歯科学会雑誌 14 巻 2 号 p 380-388：1987 年
- 15) 厚生大臣官房統計情報部「保健福祉動向調査（歯科保健）平成 11 年」厚生労働省、東京：2001 年
- 16) 大岡知子、他「歯科衛生士学生の入学動機に関する意識調査－3 年制学生と 2 年制学生の比較－」全国短期大学歯科衛生士教育協議会会誌 第 10 号 p 40-44：2006 年 3 月

